

建築主：近畿労働金庫 永田憲一

設計者：株式会社日建設計 多賀謙蔵、嘉村武浩、加登美喜子

施工者：株式会社銭高組 下土井節男



北面ファサード見上げ（撮影：東出清彦）

建築概要

建設地：大阪府大阪市西区

建築主：近畿労働金庫

設計：株式会社日建設計

施工：株式会社銭高組

建築面積：1,213.98㎡ 延床面積：13,515.67㎡

階数：地上13階、地下1階 高さ：58.75m

構造種別：鉄骨造、鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造

選評

この建物を特徴づけているのは、なんといっても南北面のラチスウォールである。マリオン状の細い柱材とテンションロッドとで編むようにラチスウォールが構成されている。この外装によって、高層建築でありながらも繊細なイメージを作り出すことに成功している。街の風景の中で威圧的にそびえるのではなく、柔らかに周囲と接する建築である。

さらに、この繊細な架構を、ダブルスキンとして自然換気を行い、さらに架構越しの採光面として利用して3方向からの採光を実現するなど、設備・環境計画上も有効に機能させている。免震を利用することで実現した構造計画を、さまざまなレベルで生かしているさまがうかがえる。ともすると免震技術は、付加的に取り扱われることが多く、時には過剰な提案と映ることもある。ここでは免震技術が、無理なくまた無駄なく生かされている。その点を高く評価したい。

一方、この繊細なラチスウォールが室内から見えな（見えづらい）ことは疑問であった。光環境以外にも、執務室の空間にも寄与できればと思う。自由度の高い執務空間を獲得しているがゆえに、惜しまれる点だった。

（小泉雅生）

免震化した経緯及び企画設計等

本建物は金融機関の本部ビルであり、大地震時における防災拠点としての耐震性が求められた。これに対し、免震構造を採用することで、高い耐震性の確保に加え下記特徴を有する建物を実現している。

- ・ 上部架構の耐震要素を偏心配置させ、前面道路側の架構をロングスパン架構として開放感のある眺望を確保していること。
- ・ 上部架構が弾性設計とできることを利用して南北面の架構をテンションロッドにより構成されるフレームとし、3方向から採光が得られる快適な執務空間を実現していること。

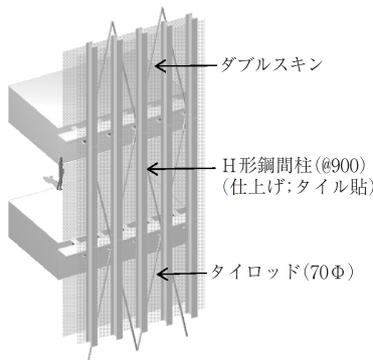
技術の創意工夫、新規性及び強調すべき内容等

テンションロッドにより構成される南北面架構は設備計画・自然喚起が可能なダブルスキンとなっており、建築デザインと構造計画、設備計画が一体となったシステムが南北面ファサードとして表現されている。

テンション材をブレースとして用いる場合座屈に対する配慮が必要となるが、若干のプレテンションを導入するとともに端部のピンディテールに工夫を行うことでこの問題に対処し、テンションロッドにより構成される架構を実現している。



前面道路側のロングスパン架構（撮影：野口兼史）



南北面ファサード構成図



建物全景（撮影：東出清彦）